

北軽井沢のカラマツ林の林床で出会った、小さな褐色のキノコです。落ち葉や細い枝が積もる地面から、細く長い柄を伸ばし、円錐形の傘を掲げる姿は、まるで森の住人が静かに立っているかのような印象を受けます。夕方の柔らかな木漏れ日が傘の縁やひだを照らし、林床ならではの落ち着いた雰囲気を引き立てています。カラマツ林には多くの小型褐色菌が生育しており、一見よく似た種類が数多く存在するため、観察者を悩ませるグループでもあります。

この写真の個体は、形態や生育環境からムジナタケ属 *Phaeocollybia* の一種と考えられます。ただし、正確には「ムジナタケ」という特定の一つではなく、「ムジナタケ属」の可能性が高いという段階です。この仲間は傘や柄の特徴だけでなく、地中深くまで伸びる根状の柄（偽根）、胞子の形や大きさ、胞子紋の色などを総合して初めて種を決定できるため、写真だけでの同定は極めて困難です。国内でも分類学的な整理が十分ではない種類があり、専門家でも標本を顕微鏡で調べるのが少なくありません。

それでも、この写真はムジナタケ属の特徴である、細長く繊維質の柄、中央がやや盛り上がった円錐形の傘、黄褐色のひだ、そしてカラマツ林という生育環境をよく捉えています。キノコ観察では、美しい写真だけでなく、柄の基部を含めた全体の採集や胞子紋の記録が、正確な同定への重要な手掛かりになります。このような「名前がすぐには決まらないキノコ」と出会えることも、北軽井沢の豊かな森林が持つ生物多様性の魅力の一つといえるでしょう。

(2026 年 6 月中旬／北軽井沢)

